青森県総合学校教育センター　研究紀要［2010.3］
Ｇ２－０２

小学校　社会

社会的な見方や考え方をはぐくむ社会科学習の在り方
－地域教材の活用と問題解決的な学習過程の工夫を通して－

義務教育課　　研究員　　工　藤　　直　樹

要　　旨

「地域の発展に尽くした先人」として，「ふじ育ての親」斉藤昌美を教材化し，具体的な地域の事象，施設，人材等を活用した学習を展開したことによって，多様な問いが引き出されるなど，単元を通して問題意識が持続した。また，問題解決的な学習過程に，集団思考によるお互いの考えを深める話合い活動を取り入れることによって，先人の業績に対する認識が深まり，その努力や思いに共感し，自分の考えを再構成するなど，多面的に考察することができるようになった。

キーワード：小学校　社会　地域教材の活用　問題解決的な学習　ふじ準原木　斉藤昌美

Ⅰ　主題設定の理由

社会科の学習のねらいは，社会生活についての理解を深め，公民的資質の基礎を養うことにある。この公民的資質を養うために必要不可欠な要素が社会的な見方や考え方であり，これをいかにとらえ，はぐくむかが学習指導上の課題である。

社会的な見方や考え方は，児童が主体的に問いをもち，進んで調べたり考えたりする問題解決の過程においてはぐくまれる。従来，問題解決的な学習は，児童に自ら学び自ら考える力を育成する観点から重視されてきた。しかし，実際の社会科の授業では，「問題をつかむ→調べる→まとめる」という学習過程を形式的になぞるだけであったり，教師の指示による活動が中心で，児童に主体的な学習がみられなかったりなど課題も多く，決して十分に行われているとはいえない状況にある。

小学校中学年では身近な地域社会が学習の対象となり，地域教材を活用した学習が展開される。そこでは児童の主体的な学習が促され，地域の様々な人や事象とかかわり合う中で社会認識が深まり，多面的な見方や考え方がはぐくまれる。学習指導上の課題としては，地域素材の教材化の在り方や体験的な活動の学習過程における位置付け，社会科副読本の活用などが挙げられる。

以上のことから，社会的事象に関心をもって多面的に考察するなどの社会的な見方や考え方をはぐくむためには，身近な地域教材を活用し，学び合いの場を工夫した問題解決的な学習を展開することが有効であることを，実践を通して明らかにするものである。

Ⅱ　研究目標

「地域の発展に尽くした先人」の学習において，社会的事象に関心をもって多面的に考察する力を育成するためには，身近な地域教材を活用し，学び合いの場を工夫した問題解決的な学習過程が有効であることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

社会科の学習において，次のことを実践することで，社会的な見方や考え方がはぐくまれるであろう。

・身近な地域素材を教材化し，活用することによって，児童が様々な人や社会，自然，文化などの社会的事象に主体的にかかわり，追究する能力や態度が育成されるであろう。
・自らの問題の解決に向けて，習得した知識や概念，技能を活用し，再構成する学び合いの場を工夫することによって，社会的事象を多面的に考察する能力が育成されるであろう。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　研究の内容

社会的な見方や考え方は，児童が社会的事象を読み解くときの根拠となる，いわば概念的枠組みである。これは，社会に対する知識や見方であり，社会的事象を調べる方法や視点でもある。

これらは，児童が自ら問題を発見し，自分なりに考えたり判断したり，体験したり表現したりしながら，問題を解決していく学習活動を通して身に付いていく。その過程や結果において，社会的事象に対する思考力・判断力・表現力や，新たな問題解決に必要な知識・技能が獲得され，主体的な学習態度が育成される。そこで本研究では，次の２点の有効性について，授業実践を通して明らかにすることとした。

(1) 問題解決的な学習過程の工夫

問題解決的な学習過程に，集団思考によってお互いの考えを深める話合い活動を取り入れることによって，社会的事象を多面的に考察する力が育成されると考え，次の場面で検証した。

学習問題の把握の場面において，個々の問いを説明し合ったり，調べる内容や方法を話し合ったりする学習活動を取り入れた。このことによって，個々の問いが共有化，焦点化され，学級全体で追究する学習問題を設定することができると考えた。また，学習問題の解決の場面において，個々に見学や聞き取り調査で調べ，考えたことを小集団で話し合う活動を取り入れた。このことによって，先人の業績に対する理解を通して，その社会的意味に関心をもち，考えを深めることができると考えた。

(2) 身近な地域教材の活用

「地域の発展に尽くした先人」として，青森りんごの発展に大きな功績を残した「ふじ育ての親」斉藤昌美（1918～1991）を教材化した。

りんご生産量日本一を誇る青森県であるが，その発展の陰には，明治以来，連綿と続いてきた生産者自身の努力や，育種や病害虫防除など研究機関の地道な取組といった歴史がある。昭和44年に起きた植栽以来の主力品種「国光」の価格の大暴落は，大量に売れ残ったりんごを農家自身が廃棄するという「山川市場」と呼ばれる悲劇的な事件を引き起こした。この青森りんごの危機を救ったのが「ふじ」をはじめとする新品種への更新である。ところが当時のふじは，味覚や貯蔵性に優れるものの着色に難があり，その欠点を補う栽培技術が確立されていなかったため，農家への普及も進んではいなかった。その栽培技術を確立し，普及に尽力したのが「ふじ育ての親」斉藤昌美である。昌美の功績により，ふじは多くのりんご農家に広まり，農家の生活は守られた。そして，ふじは現在も盛んに栽培され続けているのである。昌美のふじ育成の苦心の歴史が刻まれたふじ準原木は，平成３年に昌美が亡くなった後，斉藤昌美顕彰会の人たちによって守られてきたが，昌美の功績とふじ準原木の意味をより多くの人に知ってほしいと願う斉藤昌美顕彰会が弘前市の協力を得て，年間十数万の人が訪れるりんご公園に移植したのである。

本実践では，りんごもぎの体験などで児童にとって身近なりんご公園におけるふじ準原木の移植を取り上げ，りんごづくりの歴史的な側面に触れさせるとともに，学習への意欲付けを図った。そして，昌美のりんごづくりにかけた情熱と業績を後世に伝えようとする斉藤昌美顕彰会や，ふじ準原木とりんご公園を管理する弘前市の協力を得ることによって，昌美から直接指導を受けた農家の人や，昌美の栽培技術に少しでも近付こうとりんごづくりに励んでいる農家の人など，地域の人たちとかかわり合う中で学習を展開した。このように，具体的な地域の事象，施設，人材等を活用した学習を展開することによって，事象のもつ多面性に気付かせ，社会認識を深めさせることができる。また，身近なりんごの陰に先人の努力や苦心の積み重ねがあったことを，実感を伴って理解させることも可能となる。そして，児童が地域を見直し，今まで意識することのなかった地域のよさに目を向けるきっかけにもなり，地域社会に自らかかわろうとする態度が育成されると考えた。

図１　ふじ準原木

２　検証授業の実際

研究の内容を基にして検証授業を行い，児童の学ぶ様子，ワークシートの記述や学習後の感想，事前及び事後に行うアンケート調査の結果を考察することによって，地域教材の活用と問題解決的な学習過程の工夫の有効性について，実践を通して明らかにすることにした。

実施期間は平成21年６月１日～６月12日で，対象は弘前市立城西小学校４年１組21名である。授業の概略は，次のとおりである（第１時～第９時まで）。

◆単元計画（９時間扱い）

問題の発見

1．資料を活用して，日本一の青森りんごの歴史と先人のかかわりについて考え，話し合う。
2．りんごに関する記念碑や銅像の分布調べや年表を手掛かりにして，先人の業績を調べる。
3．ふじ準原木の移植の写真から，気付いたことや疑問点を出し合い，学習問題を設定する。

【学習問題】
斉藤昌美さんのふじ準原木が大切に守られ，りんご公園に移植されたのはなぜでしょう。また，「ふじ育ての親」とよばれる昌美さんはどんなことをした人なのでしょう。

学習問題の把握

4．学習問題についての予想を立て，それを確かめる計画を立てる。
≪学び合い①≫個々の問いを説明し合ったり，調べる内容や方法を話し合ったりする学習活動
・ふじ準原木が大切に守られてきた理由と斉藤昌美顕彰会の思い
・ふじ準原木がりんご公園に移植された理由と弘前市の取組
・「ふじ育ての親」と呼ばれる斉藤昌美の思いや願い，工夫や努力，苦労

学習問題の追究

5．学習問題を追究する。
○弘前市りんご公園で観察，調査活動を行う。
・ふじ準原木と斉藤昌美顕彰会の思い
・ふじ準原木とりんご公園に移植した弘前市の取組
・斉藤昌美の思いや願い，工夫や努力，苦労
○「山川市場」と斉藤昌美の働きとのかかわりを調べる。
6．調べたことを基に，学習問題の解決に向けて話し合う。
≪学び合い②≫個々に見学や聞き取り調査で調べ，考えたことを小集団で話し合う活動

学習問題の解決

7．学習のまとめと発展
○学習問題に即してまとめ，学んだことを生かしてメッセージを考える。
・「ふじ育ての親」斉藤昌美の働き
・りんご公園に移植されたふじ準原木の意味

図２　単元計画と主な学習活動

【第１時】日本一の青森りんごと先人
学習活動：資料を活用して，日本一の青森りんごの歴史と先人のかかわりについて考え，話し合う。

地域の事象の歴史的な側面に気付かせ，教材に対して興味・関心を高めることが本時のねらいである。

児童に弘前の自慢を質問したところ，21名中13名がりんごを挙げた。その理由としては，「味や色がいいから」「たくさんつくっているから」など，これまでの経験や学習したことが挙げられ，歴史的な視点で考えた児童はほとんどいなかった。そこで「りんごの木を初めてつくったから」という児童の意見を生かし，『07年産本県リンゴ収穫量日本一 100回目（新聞記事）』及び『 132才の日本一の古木りんご樹（つがる市柏）』の資料を活用し，りんごづくりのはじまりや日本一になるまでの歴史などについて，全体で考えさせた。特に資料の「先人の努力のおかげ」「弘前市の先人から譲り受けた苗木を1878（明治11）年に植えたもの」という部分に注目させ，先人の存在と働きを意識させるようにした。この結果，りんごの歴史的な側面に興味・関心が高まり，地域の先人について調べようとする意欲付けができた。

【第２時】りんごづくりの先人の記念碑や銅像
学習活動：りんごに関する記念碑や銅像の分布調べや年表を手掛かりにして，先人の業績を調べる。

りんごづくりの先人について，年表や地域に残る記念碑や銅像を手掛かりに調べさせた。

まず，歴史的な事象を調べる方法について見通しをもたせるために，教科書の事例「用水を開いた先人」を学習の手引として活用した。その後，県内のりんごの記念碑や銅像の分布をワークシートを使って調べさせた。弘前市に多く残されていることや，記念碑にりんごづくりの節目や新品種，益虫の導入を記念したものなど様々なものがあることから，弘前とりんごづくりの先人が深く関連していることや，りんごづくりには様々な出来事があったことなどを考えさせることができた。その上で，弘前市社会科副読本の年表を活用して，代表的な先人について，いつごろ，どんなことをした人なのかを調べさせた。この学習の結果，先人の業績や地域に残る記念碑や銅像がもつ社会的意味に対しての考えを深め，りんごづくりの発展に地域の先人がどのように貢献してきたのか，といった問題意識をもたせることができた。

【第３時】≪事象との出会い・問題の発見≫　りんご公園に移植されたふじ準原木
学習活動：ふじ準原木の移植の写真から，気付いたことや疑問点を出し合い，学習問題を設定する。

ふじ準原木の移植という事象との出会いである。まず，資料として移植の記録写真を数枚，拡大投影して児童に提示した。木の様子や人物の表情などの視点を明確にして読み取らせ，気付いたことや考えたことを発表させた。児童は，りんご公園に古いりんごの木が植えかえられていることや，大切に扱われていることに気付き，前時までの学習と関連付けて「何かのはじまりに関係のある貴重なりんごの木じゃないかな」と

いった予想を立てていた。スライド形式による資料提示が児童の問題意識を強く引き出し，身近なりんご公園の出来事をあたかも見学しているかのように驚き，興味深く見ていた。また，視点を明確にして解釈させたことによって，多様で細部にこだわった問いが生まれた。

次に，移植の概要を理解させるために，資料『ふじ準原木について（りんご公園内のふじ準原木解説）』を与え，自分たちの読み取りと比べさせた。その結果，「なぜふじの木なのか」「なぜ弟子の人たちが移植したの」「なぜりんご公園に移植したの」「畑に置いたままではいけなかったの」という具体的な問いが出された。

図３　ふじ準原木の移植

疑問に思ったことや調べてみたいこととして，18人の児童が「なぜ昌美さんのふじの木がりんご公園に植えかえられたのか」といったことを挙げていた。他にも「昌美さんの木をもっとくわしく調べたい」「実際にりんご公園に行って，枝や幹はどうなっているか調べてみたい」といった観察や調査活動に意欲的なものや，「なぜ弟子たちは，その木をふじ準原木と呼んだのか」「なぜ昌美さんがつくったふじの木は有名になったのか」「ふじ準原木の移植が弘前りんごの活性化につながるとはどんなことか」といった聞き取り調査の内容につながるものが出された。提示した写真資料を，視点を明確にして詳細に読み取ったことや，それを基に別の資料で確かめたことによって問題意識が高まり，問いが具体的になったと考えられる。

【第４時】≪学習問題の把握≫　りんご公園に移植されたふじ準原木
学習活動：学習問題についての予想を立て，それを確かめる計画を立てる。

学習問題の把握の場面において，個々の問いを説明し合ったり，調べる内容や方法を話し合ったりする学び合いの場を設定した。

前時の問いから，「斉藤昌美さんのふじ準原木が大切に守られ，りんご公園に移植されたのはなぜでしょう。また，『ふじ育ての親』とよばれる昌美さんはどんなことをした人なのでしょう」といった学習問題が設定された。さらに，「ふじ準原木や記念碑を見ることができるし，いろいろな人に聞ける」といった，りんご公園での観察や調査の必要性が提案されたことを受け，次時に調査活動を実施することにした。

次に，学習問題を解決するためには，どのような内容をどのように調べればよいのかを，自分たちが質問することを前提に考えさせた。ペアで話し合った後，自由に意見を交換させた。話合いの観点を明確にするために，前時の問いの一覧を拡大印刷して壁面に掲示し，自由に見てよいこととした。この結果，次のような問いが出された。

＜本時に出された主な問い＞
①昌美さんの弟子の人たちは，どうして移植を決めたのですか
②枯れるかもしれないのに，なぜ根を切ってまで植えかえをしたのですか
③なぜ昌美さんの大事な木なのにりんご公園においたのですか
④枝の切り口にどうして薬を塗っていたのか
⑤実は何個つくのか
⑥どんな世話をしているのか
⑦ふじ準原木とふじの原木の違いは何か
⑧りんご公園でなく他の場所に置くとかすればだめなのですか
⑨りんご公園にふじ準原木を移植することが，弘前りんごの活性化につながるというのはどういうことですか
⑩昌美さんはなぜ「ふじ育ての親」と呼ばれるのか
⑪昌美さんはなぜふじ準原木の穂木を譲り受けたのですか
⑫昌美さんの記念碑がなぜつくられたか
⑬昌美さんはりんごの木にどんな世話をした人なのか

①～③は，移植に対する思いや願いにかかわる問いである。「斉藤昌美さんのお弟子さん」と，聞き取る相手を明確に意識したことで，問いが具体的で切実なものになった。

④～⑦は，ふじ準原木そのものにこだわった問いで，現在の木の状態や由来を問うものである。これらは，観察したり，聞き取り調査をしたりすることによって明らかになる内容である。

移植場所の選定にかかわる⑧については，市役所の人やりんご公園で働く人に直接聞いた方が詳しく分かる，と児童は期待していた。また，⑨については，難しい内容ではあるが，地域資源としてのふじ準原木の活用を考える上で重要な問いである。ぜひ疑問を明らかにしてほしいと励ました。同時に，地域社会に開かれた公共施設としての弘前市りんご公園の役割やよさを再確認できる機会でもあると考えた。

⑩～⑬は，ふじ準原木の移植から読み取れる目に見える事実から，その目的や意義，先人の働きなどの目に見えない事実に対して意識が向けられた問いである。移植はあくまでも業績を多くの人に知ってもらうことが目的である。そのことを理解した上で，「ふじ育ての親」としての具体的な働きとは何か，どんな思いや願い，工夫や努力，苦労があったのかを追究することによって明らかになる内容である。

これらのことから，自他の意見を比べ，意見交換する場を設けることで，多様な見方や考え方があることに気付き，自分の考えをより明確にしたり，再構成したりすることができた。その結果，個々の問いが共有化，焦点化され，学級全体で追究する学習問題に対して問題意識を高めることができた。

【第５・６時】≪学習問題の追究≫　ふじ準原木と斉藤昌美を調べる
学習活動：学習問題を追究する。　〇弘前市りんご公園で観察，調査活動を行う。

本時は，３人のゲストティーチャーに来ていただき，順次お話を聞くという形をとった。移植されたふじ準原木については，その活用の在り方や移植の実際，ふじ準原木の世話や健康状態などを追究することから，弘前市の担当の職員とりんご公園専任指導員の二人に依頼した。また，斉藤昌美のふじ育成の取組を追究することから，直接かかわりのあった斉藤昌美顕彰会の方にも依頼した。それぞれの立場の違いから，児童に伝えることのできる内容は限られてくることや，斉藤昌美やふじ準原木に対する思いにも違いが見られることが予想された。しかし，この調査活動は，先人の業績について理解する場であると同時に，地域の事象のもつ多面性を考えるよい機会でもある。また，三人のゲストティーチャーの語り口や表情などからは，それぞれの思いをくみ取ることもできるであろう。このようなかかわりをもつことで，先人の業績や地域の自慢であるりんごについての認識が深まり，再考することで，新たな問いが生まれたり，自分なりの価値付けが促されたりすると考えた。

図４　調査活動の様子

活動の結果，児童は，ふじ準原木を大切にしようとしている弘前市の取組や，斉藤昌美のふじ育成の工夫や努力について記録し，自分なりに考えをまとめることができた。また，自由時間を活用し，積極的に複数のゲストティーチャーとかかわり，追究する姿も見られた。振り返りからは，ふじ育成の第一人者としてだけでなく，ふじを広めた働きに対する理解が深まったことが読み取れる。調査活動を通じて，多くのことを知り得ただけでなく，複数のゲストティーチャーとかかわり，それぞれの思いに触れたことによって，先人の働きや地域の自慢であるりんごに対する思いが深まり，追究意欲を高めることができた。

＜振り返りより＞
・斉藤昌美さんのおかげでふじがあることが分かりました。
・弘前市が昌美さんがつくったふじを広めたいということが分かりました。
・教えてくださった３人のみなさんも，りんごのふじをとても大切にしていると思いました。
・３人のみなさんに教えてもらってよく分かったから，もっともっとふじ準原木について知りたいと思います。

【第７時】≪学習問題の追究≫　「山川市場」と斉藤昌美
学習活動：学習問題を追究する。　〇「山川市場」と斉藤昌美の働きとのかかわりを調べる。

前時の振り返りから，「山川市場」という出来事について事実認識が一面的であり，その背景についての理解が十分でなかったことが分かった。そこで，日本一の産地で起きた主力品種の大量廃棄という事実と，新しい品種への一挙更新，斉藤昌美の働きといった幾つかの要因を関連付けるために，「山川市場」について，資料を基にじっくりと調べ考えさせることにした。

まず，なぜ農家の人たちがりんご「国光」を捨てたのか，それがりんご産業にどのような影響を及ぼしたのかについて調べ，当時の農家の苦労や願いを考えさせた。そして，そのことと「ふじ育ての親」斉藤昌美の働きがどのような関連があるのかを考えさせた。弘前市社会科副読本の資料や当時の衝撃的な見出しを掲載した新聞記事，農家の心情に迫るための読み物資料を活用するとともに，所々で前時の調査活動の成果を想起させながら学級全体で追究した。

この結果，青森県のりんご農家が「山川市場」から立ち直るために尽力した斉藤昌美の働きについてはもちろん，もう一人のふじ栽培・普及の功労者である對馬竹五郎の働きについても，農家の苦労や願いと関連付けて考えさせることができた。

＜振り返りより＞
・昌美と竹五郎がいなかったらりんごが売れなかったので，二人はりんごのことを切りひらいたのですごいです。
・今日初めて，二人がふじを有名にしたことや，ふじをつくったことが分かりました。二人がふじを青森県に広めていったことがすごいと思いました。
・ふじというりんごが，りんご農家にとって大切な果物だと分かってよかったです。

【第８時】≪学習問題の解決≫「ふじ育ての親」斉藤昌美の工夫や努力
学習活動：調べたことを基に，学習問題の解決に向けて話し合う。

学習問題の解決の場面において，これまでにそれぞれがまとめたことを小集団で話し合う活動を取り入れた。学習グループを基本に，話合いの形態を図５のように工夫した。

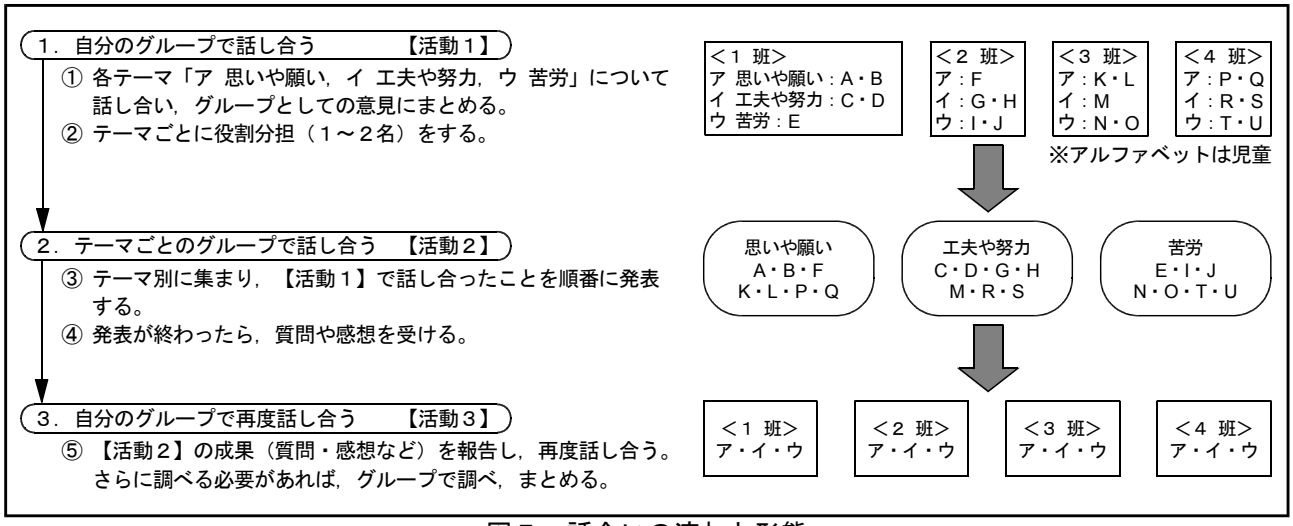

図５　話合いの流れと形態

この話合いについて，児童は次のように振り返っている。

＜振り返りより＞
・ふじの大きな欠点のことが分からなくてとっても考えました。でも，話合いなどでそのことが分かりました。
・苦労を調べたことが心に残った。質問されてつまってしまい，困ったけれど，班で話し合ってまとめたらうまくできました。
・話合いでふじのことがいっぱい分かって，思いや願い，工夫や努力，苦労のことを調べて，りんごの木の病気を防ぐ方法の意味が分かりました。
・いろんな班と話し合ってみると意外とたくさん出てきました。

これらのことから，観察，調査活動で明らかになったことやそれぞれがまとめたことを，図５のように話合いを繰り返すことによって，事実認識が確かなものになったことが分かる。また，他のグループの意欲的な発表に刺激を受けたり，他者の表現のよさに気付いたり，質問に答えられないときはすぐに話し合ったりするなど，教え合い，学び合う姿も見られた。その反面，自分のグループでの話合いはスムーズにいったものの，テーマ別に分かれたときに，用意した資料をうまく活用できなかったり，質問にうまく答えられなかったりして困惑している様子も見られた。

課題も多かったが，意図的，計画的に指導過程に学び合いの場を組み込むことが，学びの質を高め，児童の社会的な見方や考え方をはぐくむことにつながるものと思われた。何よりも児童自身が反省点を挙げ，話合いをもっとよくしたい，もう一度チャレンジしたいといった振り返りや，「もっと考えようよ」と熱心に呼びかけ，後半に取り組んだグループが見られるなど，多くの児童が学び合うことを前向きにとらえていたことが大きな成果であったと考える。

また，斉藤昌美の働きに触れた振り返りは，次のようなものがあった。

＜振り返りより＞
・昌美さんは，たくさんの苦労を乗り越えて，いろいろな工夫を考えたんだなあと思いました。
・昌美さんはすごく研究熱心なんだと，今日の勉強でますます思いました。自分の家に帰らないでりんごの木を観察したりして，すごいと思いました。昌美さんは，どんなことを思いながらりんごの木を観察していたのかな。
・昌美さんは，観察や実験を繰り返してふじをつくって，農家のやる気を取り戻させたのがすごいと思った。
・工夫や努力をして，りんご農家の人たちのために，昌美さんは自分のことじゃないのにすごいと思います。
・せっかくつくったりんごが売れなくなって無駄になってしまって，農家の人がかわいそうに思いました。
・昔のふじは色づきが悪く，味にばらつきがあったのに，今の甘いりんごと比べると全然違うことにびっくりしました。

児童は，斉藤昌美の努力やりんごづくりにかけた強い思いに対する認識を深めたり，りんご農家の気持ちを考えたり，現在のふじと比べて考えたりしながら，多面的な見方でりんごをとらえ直していることが分かる。また，斉藤昌美の働きについて理解が進むにつれて，りんごづくりにかけた強い信念についての興味が深まった。協同的に学び合うことによって，努力や働きの意味をもっと明らかにしたいという強い意識が，個々に生まれたためと考える。

次時は「ふじ育ての親」としての業績そのものと「ふじ普及の最大の功労者」として斉藤昌美が今も尊敬され，感謝されている事実を関連付けながら，学習のまとめを行うことにした。

【第９時】≪学習のまとめと発展≫ふじ準原木と斉藤昌美の業績のまとめ
学習活動：学習問題に即してまとめ，学んだことを生かしてメッセージを考える。

斉藤昌美のりんごづくりに対する深い思いについて，改めて考えさせるために，ふじ準原木記念碑の碑文『りんご道』を提示した。一農家でありながら，修行に近い気持ちでりんごづくりに取り組んできたことを簡単に解説し，「なぜりんご畑の小屋に寝泊まりして，実験や観察，研究を繰り返したのか」「りんごの木のどんな声を聞いていたのか」といった前時の問いと関連させて，その思いを考えさせた。そして，ひとつのグループのまとめをプロジェクターで投影しながら，斉藤昌美の思いや願い，工夫や努力，苦労について全体で確認しながら，板書でまとめた。

最後に，「昌美さんは，いつもいいりんごをつくることだけを考え，そのことがりんご農家の生活を豊かにすることにつながるという強い思いでふじをつくっていた」という，調査活動のときのゲストティーチャーの話を生かし，再度その思いが業績を成し遂げたことを考えさせ，単元の学習を振り返らせた。

一番心に残った斉藤昌美の働きについて書かせたところ，ふじの栽培に試行錯誤して取り組んだ斉藤昌美の生き方に共感した振り返りが多く見られた。これらからは，日本一の青森りんごが先人たちの努力の上に成り立ってきたことを，「ふじ育ての親」斉藤昌美の学習によって身に付いた見方や考え方でとらえ直し，自分なりに価値付けしていることが読み取れる。

＜一番心に残った斉藤昌美の働き＞
・ふじのりんごを育て，ふじのりんごをこの日本に広めた
・昌美さんがいないと山川市場から切り抜けられなかった
・一生懸命育てたふじの木の枝をみんなに分けた
・国光が捨てられたのに，ふじをつくり，立ち直らせた
・りんごふじを農家に広めて，青森県を助けた
・青森県にすごくいいことをした

３　児童の変容

事前及び事後にアンケート調査を行い，その変容を確認した。

回答の項目は，「好き／どちらかというと好き／どちらかといえばきらい／きらい」とした。ただし，問２～５の事後アンケートの回答の項目については，児童に学習の成果を振り返らせるために，「できた／どちらかというとできた／どちらかというとできなかった／できなかった」とした。

(1) 教科に対する意識の変容（図６）

問１では「社会科の勉強が好きになった」と答えた児童が増えた。その理由としては，「資料を見ることが楽しいから」「いろんな方法で調べたから」「調べ学習が楽しかった」といったものや，「りんごのことやいろいろなことをもっと調べたい」「りんごや先人のことをもっと調べてみたい」「いろいろなことが発見できる」「社会科の勉強をすると次々に疑問が出てくるので好きになった」といった積極的なものが見られた。疑問が明らかにされていく楽しさを実感できたことや，分かることによって身近な地域の社会的事象を見直し，さらに興味や関心が高まったことなどが要因として考えられる。

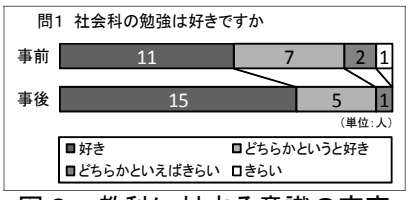

図６　教科に対する意識の変容

(2) 授業における学びの変容（図７）

全体的に「できた」と答えた児童が増えた。特に，問２の自分の疑問を基にした学習と，問３の主体的に調べたり，自分の考えをまとめたりする学習について「できた」と答えた児童が増えた。ふじ準原木の移植から導き出された問題意識を，単元を通してもたせ続けることができたことが要因の一つとして考えられる。

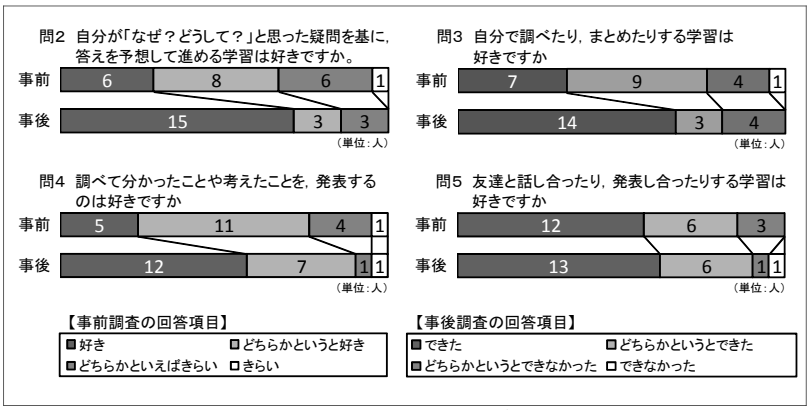

図７　授業における学びの変容

問４に関しては，分かったことを中心に記述する児童が多かった。自分なりの考えをもたせ，表現させるには，教師と対話しながら振り返りをさせるなど，個に対応した手だてが必要であると考える。見方が大きく変わったり，他の事象と関連付けたりした記述を賞賛したり，紹介したりすることで，問題に対する意識が確かなものとなり，追究意欲もまた高まっていくと思われる。

問５の話合いや発表し合う学習については，幾つかの班がうまくできなかったと反省している。自己主張の強い児童に振り回され，話合いにスムーズに入れなかったことが影響したと思われる。活動の慣れも

関係すると思われるが，「今回はうまくいかなかったけれど次はうまくやりたい」「他の班のよい点を見習いたい」といった前向きな振り返りが多く見られたことは，この活動が有益であることを自覚していることを示す。児童の実態に応じて，基本的な話合いのルール等を徹底させることはもちろん大切である。それとともに，発表の場は自分の意見を他の人に聞いてもらえる場であること，話合いによって他の意見と比較・検討する中で自分の考えを深めることができることなど，集団思考のよさを実感させることが重要であると考える。

Ⅴ　研究のまとめ

・ふじ準原木の移植について必要な要素が含まれた資料を工夫して提示し，観点を明確にして読み取りをさせた。このことにより，ねらいに即した詳細な読み取りや解釈が行われ，多様な問いを引き出すことができた。これが問題追究への動機付けになり，単元を通じて児童の意欲を持続させることができた。
・問題解決的な学習過程に，必然性をもたせた観察，調査活動や，協同的に学び合う学習問題の追究，解決の場を取り入れた。このことにより，新たに問題を発見したり，視点を変えて事象をとらえ直し，考えを再構成したりするなど，多面的に考察する力の育成に一定の成果をみることができた。
・自分なりに考え判断したことを表現し合い，協同的に学び合う過程や結果において，先人の努力やりんごづくりにかけた強い思いに対する認識が深まり，再構成された。多様な見方や考え方に触れるなど，自他の考えを比較し，検討する場として話合い活動が有効であったと考える。

Ⅵ　本研究における課題

・問題解決の過程において，自力解決ができずにいる児童や観察，調査の技能が不十分な児童に対する教師の支援，事実認識を深め追究意欲を持続させるための手だてなどについての検討が必要である。
・話合い活動が一方的な報告や発表に終わるのではなく，双方向のやりとりの中でお互いの考えが深まっていくための手だてが必要である。社会科の授業における教科の特性を生かした言語活動を充実させる必要性を感じた。
・自分の考えを再構成してまとめたり，学習した内容や方法などについて，じっくりと振り返ったりする時間を十分確保できなかった。集団思考の成果を活用して個々に考えを修正したり，認識の深まりや広がりなどの変容を自覚したりするためには，ノート指導や，時間の確保，場の設定などについて検討する必要がある。

＜参考文献＞

小原友行　2009　『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン　小学校編』　明治図書
片上宗二・柳下則久　2008　『小学校学習指導要領の解説と展開　社会編』　教育出版
北俊夫・片上宗二　2008　『小学校新学習指導要領の展開　社会科編』　明治図書
北俊夫　2008　『平成20年改訂　小学校教育課程講座　社会』　ぎょうせい
北俊夫　2008　『新教育課程と社会科の授業構想』　明治図書
国立教育政策研究所教育課程研究センター　2008　『特定の課題に関する調査（社会）調査結果（小学校・中学校）』
中央教育審議会　2008　『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』
波多江久吉・斎藤康司　1977　『青森県りんご百年史』　青森県りんご百年記念事業会
弘前市小学校社会科教育研究会　2008　『社会科副読本　わたしたちの弘前』　弘前市教育委員会
廣嶋憲一郎・新社会科研究会　2008　『平成20年版小学校新学習指導要領ポイントと授業づくり　社会』　東洋館出版社
藤井千春　1996　『社会科教育全書33　問題解決学習のストラテジー』　明治図書
文部科学省　2008　『小学校学習指導要領（平成20年３月告示）』
文部科学省　2008　『小学校学習指導要領解説　社会編（平成20年８月）』
文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　社会編（平成20年９月）』
山田三智穂　1994　『リンゴ道の探求者－斉藤昌美の人と技術』　弘前市斉藤昌美顕彰会